



| | |
|--------------|--|
| Title | 集団極化現象と模擬社会ゲームにおけるコンフリクト ：社会的アイデンティティと共有認知の形成過程 |
| Author(s) | 有馬, 淑子 |
| Citation | 大阪大学, 2003, 博士論文 |
| Version Type | |
| URL | https://hdl.handle.net/11094/44481 |
| rights | |
| Note | 著者からインターネット公開の許諾が得られていない ため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利 用をご希望の場合は、大阪大学の博士論文につい てをご参照ください。 |

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

氏 名 ^{あり}有 ^ま馬 ^{よし}淑 ^こ子

博士の専攻分野の名称 博 士 (人間科学)

学 位 記 番 号 第 17960 号

学 位 授 与 年 月 日 平成 15 年 3 月 25 日

学 位 授 与 の 要 件 学位規則第4条第2項該当

学 位 論 文 名 **集団極化現象と模擬社会ゲームにおけるコンフリクトー社会的アイデンティティと共有認知の形成過程**

論 文 審 査 委 員 (主査)

教 授 大坊 郁夫

(副査)

教 授 三浦 利章 助教授 渥美 公秀

論 文 内 容 の 要 旨

概要 集団内コンフリクトと集団間コンフリクトが、どのような条件下で生じ、どのような態度変容を導くのかについて、集団極化実験と模擬社会ゲームを使用して検討した。主な結果は、討議集団の平均値傾向が母集団の平均値傾向と異なっている時に集団内コンフリクトが起こりやすいこと、そして、集団内の意見分布を間違えて認知すると集団間コンフリクトが起こりやすいことである。また、集団内の意見の相違が小さい条件下で集団内コンフリクトを起こした集団では、通常の極化現象とは逆方向の態度変化が生起することが示された。これらの実験結果は社会的アイデンティティ理論と社会的共有認知の観点より検討された。

第1章 序論

本研究で取り上げられる、リーダーシップ、コンフリクト、社会的影響過程などの諸概念を、社会的アイデンティティ理論と社会的共有認知の観点より検討した。最適な社会的アイデンティティを保とうとする認知・動機過程が集団間コンフリクトの原因となる一方で、集団内・集団間の共有表象の一貫性を保とうとする認知・動機過程が集団内コンフリクトの原因となると理論的に仮定した。

第2章 合意集団における集団極化現象

理論的検討 未だに統一見解のない集団極化現象について、説明理論の比較検討を行った。集団討議によって母集団の表象体系が共有されるために、集団極化現象が引き起こされるとの仮説を提示した。

実験的検討

1 社会的アイデンティティ理論と社会的決定スキーマ理論による集団極化現象の説明仮説を比較検討した。その結果、いずれの理論によっても、集団討議によって概念の再構成が行われた項目に関しては予測出来ない結果が示された。

2 集団討議によって母集団の意味ネットワークと合致する非共有情報が産出されることが実験的に示された。

3 メンバー間で記憶が分散されると態度の極化が起こることが実験的に示された。

4 集団内で共有された知識には、情報の解釈を変化させるスキーマとしての働きがあり、集団討議がそのバイアスを増加させることが示された。しかし、知識が社会全体に広がるような時代変化が起こると、もともと共有知識の

多い群の態度が逆方向に向かうことが示された。

5 内集団を似通って認知する少数者集団の認知バイアスが集団討議によって極端化させるかどうかを検討した。短時間の討議では極端化するが、長時間の討議を行った場合には極端化しない結果が示された。

第3章 非合意集団における集団極化現象

理論的検討

非合意集団が起こす態度変容として、元の平均値傾向を極端化する極化、元の平均値に収束する平準化、元の平均値傾向から逆転する反極化、二つの分派が異なる方向へ極端化する両極化、の4つの可能性が示された。これらの異なる結果をコントロールする要因として、集団の平均値、集団の分散、そして社会的アイデンティティの3つの要因が存在すると考察された。

実験的検討

1 討議前の意見分散と平均値が合意確率と態度変容に及ぼす影響を検討した。小集団の平均値傾向が母集団の傾向と逆であると合意確率が下がる。意見分散が小さいと小集団の平均値にかかわらず母集団の平均値傾向に逆らう反極化現象が見いだされた。

2 討議前に推定した平均値が母集団傾向と逆であると合意確率が下がることが示された。また、コンフリクトによって両極端に態度が分かれる事実は見られず、非合意集団も同じ方向に態度変化することが示された。

3 没個性化されると合意確率が下がり、反極化現象が引き起こされる結果が示された。

4 小集団を賛成側と反対側に分けてディベートを行う条件と通常の討議を比較した。意見差が小さい状況でディベートを行うと反極化現象が引き起こされる。

5 ディベート討議では、討議中に新しく得られた非共有知識の影響力が強くなる結果が示された。

第4章 リーダーシップ認知構造の研究

理論的検討

過去のリーダーシップ尺度研究を検討して、リーダーシップ尺度内にはリーダーの人間関係志向と課題志向が認知的背反性を持っていることを考察した。しかし、2次元の独立性を保つためにはその両者が必要とされてきた矛盾点を指摘した。

実験的検討

1 調査データの分析により、リーダーシップ M 認知と圧力 P 認知の相関関係が、計画 P 認知によってコントロールされていることを示した。

2 上記の調査研究によって得られた結果を実験的に検討した。圧力 P 認知と M 認知の相関関係が、計画 P 行動によって変化することが示された。

3 プロトタイプ度（典型性）の高い意見を示したメンバーに、高いリーダーシップが認知されるかどうかを検討した。反極化を示した項目においては、プロトタイプ度がむしろリーダーシップ認知を下げる結果が示された。

第5章 集団間コンフリクト

理論的検討

集団間コンフリクトと集団内コンフリクトには相互に関連があると考え、この関係がリーダーシップによって媒介されている可能性を指摘した。

実験的検討

1 集団内コンフリクトと集団間コンフリクトの相関関係が存在するかどうかを、模擬社会ゲームによって検討した。集団間コンフリクトは社会的アイデンティティを高め、集団内コンフリクトを抑制する結果が示された。

2 実験1の結果が、リーダーシップを媒介するものであるかどうかを検討するために時系列データの分析を行ったところ、リーダーシップとコンフリクトが相互に影響することが示された。

3 内集団および外集団の意見分布の認知とコンフリクトの関係を検討した。内集団意見分布の誤認が集団間コン

フリクトを高める結果が示された。

第6章 総合考察

以上の実験結果を概説し、集団極化現象を母集団の表象体系の共有過程として提示した。また、自己概念の差異性が低下した状況で起こる反極化現象の概念図を提示した。これらの表象レベル、自己概念のレベルで起こる現象を統合する試みを行った。

次に、理論的枠組みとして、個人・集団・集団間関係の3要素を置き、それらの間に循環過程を仮定した。集団間比較と成員間比較が個人の社会的アイデンティティを形成する循環過程と、個人の共有認知と集団の母集団認知が社会的影響力を構成する循環過程を提示した。最後に、コンフリクトを制御するためには、常に集団の多様性を保つために変化し続ける必要があるとの結論を行った。

論文審査の結果の要旨

本論文は、集団における意見の変容過程を主に集団極化現象に注目して検討したものである。意見変容（保持も含めて）を促進する要因の把握、また、意見対立（コンフリクト）に作用する意見分布の違い、集団状況の違いを検討し、極化、反極化のメカニズムを社会的アイデンティティ理論、社会的共有性、認知的図式化の点から多数の実験を通じて実証的に明らかにしている。

そして、同質集団における意見拡散が大きくなること、多様な意見のある集団ほど、母集団への回帰が起りやすいことなどの知見を得ている。そこから、コンフリクトと同調が循環し、個人間比較と集団間比較が社会的アイデンティティを形成するとの、個人、集団、社会の三局構造論を提唱している。その実証性と理論的統合の調和のとれた論究は、博士（人間科学）の学位授与に十分に値するものであると判定された。